

沖永良部島

あ ん ち ゃ め ぐ わ
アンチャメグワ

唄：作田 慶子
 相方ハヤシ：東 ヒロ子
 三味線：鍋田 武則

詞章 1

* 2 番以降歌詞のみ

ヘイー なまぬあんちゃめぐわ
 わぬしはじゅみらばよ
 (ア スリースーリ)
 あとぬくいむどし
 サー なたししより
 (アンチャメグワ なたししより)

共通語訳

今の「アンチャメグワ」の唄を、私から始めますから、後の声戻し（唄の返事）は、あなたがなさってください。

※ 3 行目の相方ハヤシと、歌詞の 3 句目が声が重なります。以下も同じ。

詞章 2

あんちゃめぐわくまに さきさかなまんでよ
 くまにゆりゆりと いちよいぶしゃぬ

共通語訳

「アンチャメグワ」をここに、酒や肴（さかな）がたくさ

んあります。
ここでゆっくりと、ごちそうしてあげたいのですが。

詞章 3

あんちゃめぐわだまり がにあうしぐるしゃ
だんじゅなじるがいぬ あおしぐるしゃ

共通語訳

「アンチャメグウ」の唄でさえ、こんなに三味線と合わせることが難しいのに、まして「なーじるがい」（「いきんとう」の別名）は、もっと合わせるのが難しいのです。

※「なーじるがい」とは、三味線の弦の2番線を奏でるという意味です。この唄は歌い方が一番難しい島唄であることをいっています。

詞章 4

しけやぬがやゆら くむりたやてたや
わちやがあぬくとむ しけぬうなれ

共通語訳

世間とは何でしょうか。曇ったり晴れたりしています。
私たちがこうあるのも、世間の習いというものです。

詞章 5

しけやみじぐるま かわすなよたげに
みぐてちゅぬしちむ あいどしゆる

共通語訳

世間は水車のようなものです。お互いに心変わりがないようにしましょう。
いつかいいことが巡ってくる時も、あることでしょう。

曲目解説

この唄は、沖永良部、与論の両島で盛んに歌われています。なお、「いちんとー」がいくぶんしみじみとした唄であるのに対して、「アンチャメグワ」は、軽快な、人をウキウキさせる唄といってよいでしょう。

曲名「アンチャメ」の意味は、「歩き舞い」のことといわれます。与論では昔から輪になって歩きながら踊る時、この唄が歌われたようです。沖縄や、徳之島でも、曲目ではありませんが、踊り唄全般を「あっちゃめー」という傾向はあるようです。

ここに出てくる唄の文句は、昔の唄遊びの光景がよく表現されています。1番は、「声戻し」、つまり返歌を相手に求める歌詞です。今でこそ、一般の人が上手な唄者の唄を聞くだけの遊びが多くなりましたが、昔は遊びに参加した人は、みんな歌い手であり、聞き手でした。つまり、掛け合い（唄問答）が基本であったので、いつ誰かから返歌を求められることもあったわけです。

3番は、唄と三味線がなかなか合わないことを嘆いた歌詞ですが、これは今でもよくいわれることです。三味線は、メロディー楽器であることには違いありませんが、リズム楽器の要素もあります。たくさんの人たちで、唄を掛け合うとき、節回しはともかく、リズムだけは一定していないと、みんな楽しく遊べなかったからです。

歌唱者

作田 慶子（さくだ けいこ）昭和28年生まれ。和泊町国頭出身。

いきゃび
烏賊曳き

唄：前田 綾子
三味線：新納 安栄

詞章 1

* 2 番以降歌詞のみ

ヤラヘンヨー ヤーラヘンヨー
ヤラヘンヨー ヤーラヘンヨー
いきゃびきやむなびき
ちきゅどりやむなどり
ヤラヘンヨー ヤーラヘンヨー

共通語訳

烏賊曳き（釣り）に出ましたが、むな曳き（むだな烏賊曳き）でした。
月が出て風いでいましたが、むだでした。

詞章 2

わちゅいぐわぬなとって いきゃびきにいじて

共通語訳

私は1人っ子でしたが、烏賊曳きに出てきました。

詞章 3

かじぬみぬかわて くむぬみぬかわて

共通語訳

やがて、風が目が変わって、雲が目が変わってきました。

詞章 4

かじととみながりて くむととみながりて

共通語訳

舟は風とともに流され、雲とともに流されてしまいました。

詞章 5

ふぎよりぎよりひなあぐ ふぎよりぎよりひなしど

共通語訳

漕げ漕げ、舟の友よ。漕げ漕げ、船頭よ。

詞章 6

なんどふぎゃがてむ わがしまやみやらむ

共通語訳

なんど漕いでも、私の島は見えません。

詞章 7

なひむふぎゃがたと むなじまにちちゃむ

共通語訳

もっと漕いで行ったら、むなじま（無人島）に着きました。

詞章 8

うにぬしゅぬひちやと あさいしゅてかどて

共通語訳

ここで、海の潮が引いたら、潮干狩りをして食べました。

詞章 9

いちゅびやまぬぶて いちゅびとてかどて

共通語訳

いちごの山に登って、いちごを採って食べました。

詞章 10

はにふどきなたと はにふどきかどて

共通語訳

山ぶどうの時期になったら、山ぶどうを採って食べました。

詞章 11

あぬちじにぬぶりゃ わがうやぬみゃらんか

共通語訳

あの山頂に登れば、私の親が見えないものかと。

詞章 12

ふぬちじにぬぶりゃ わがとじぬみゃらんか

共通語訳

この山頂に登れば、私の妻が見えないものかと思いましたが見えませんでした。

詞章 13

わがとじぬはらで ななちきになゆむ

共通語訳

私の妻は妊娠していて、7か月になっています。

詞章 14

いんぐわぬくわぬうまりゆんきゃ すみとふでみんがし

共通語訳

男の子が生まれたら、墨と筆を握らせなさい。

※「学問をさせよう」という気持ち。

詞章 15

うなぐぬくわぬうまりゆんきゃ はたむぬにぬしり

共通語訳

女の子が生まれたら、機（はた）ものに乗せなさい。

※「機織りをさせよう」という気持ち。

詞章 16

わみやくぬしまに うきぐるしなとむ

共通語訳

私はこの島で、死んでしまいます。

※「うきぐるし」は「置き殺し」、つまり「放置されて死ぬ」意味と推定される。

曲目解説

「ヤラヘンヨー ヤラヘンヨー」というハヤシコトバからも、もともと、烏賊（いか）を捕る時の仕事唄だったと考えられます。沖永良部には、「ながりー」（流れの意味か）とあって、舟を潮の流れにまかせながら、釣り糸に疑似餌を付け烏賊を捕る習慣がありました。その時に歌っていた仕事唄（イト）が、やがてただの仕事唄では物足りなくなり、物語を付けたのだと想像されます。

その物語は、この録音に通りに歌われています。ある一人っ子の男が烏賊曳きのため海に出て、時化（しけ）にあって無人島に流されてしまいます。彼は妊娠7か月の妻を郷里において出てきたのでした。本人はやがてその島

で亡くなるわけですが、無人島の「いちゅびやま（苺の山）」に登って、故郷を思いやり、「もし男の子が生まれたら、学问をさせよ。女の子が生まれたら、機織りをさせよ」と、やがて生まれてくる子どもに願いをかけるところが、唄の山場です。昔から、海に出て遭難する人はたくさんいたはずですが、その人たちはいったい何を考えて死に向かうのか、その想像力がこんな話を生んだとも考えられます。

奄美大島にも徳之島にも、烏賊曳きの唄が残っていますが、沖永良部のように物語が付いていません。非常に貴重な唄といえます。

歌唱者

前田 綾子（まえだ あやこ）昭和12年生まれ。和泊町和泊出身。

いちんと一節^{ぶし}

唄：宮元 茂寿
相方ハヤシ：東 ヒロ子
三味線：鍋田 武則

詞章 1

* 2 番以降歌詞のみ

ウシー むかしいきんと一ぶし
（ヤイスリスーリ）
うらやわしりてなイ
わみやなままでむ
（ヤイスリスーリ）
わすりぐるしゃ スリー

共通語訳

昔の「いちんと一節」をあなたは忘れてしまいましたか。
私は今でも忘れることができません。

詞章 2

わしりたんてなゆみ うやからぬはたみ
くわまがすいまでむ うとてあしば

共通語訳

忘れてはいけません。親からの形見です。子や孫の末までも、歌って遊びましょう。

詞章 3

むむたしらかびに うやぬかたうつち
あさゆふちゆくるに だちゆてみぶしゃ

共通語訳

百田白紙に親のかた（姿）を写し、朝夕懐（ふところ）に入れて見ていたいものです。

※「むむたしらかび」は「百田白紙」のことで、藩政時代に使われていた和紙のこと。

詞章 4

いちんと一ちぢゆよて あがるてだうがで
ゆぬえらぶぬるが しにくまちて

共通語訳

いちんと一（地名）の頂上に寄り合って、昇る太陽を拝み、与論と沖永良部のノロが、シヌグ祭りを祀っています。

※ノロはかつて集落の祭祀を先導した女性司祭者のこと。

※シヌグ祭りは、与論、沖永良部でかつて盛んだった神祭りの1つ。

曲目解説

「いきんとう」などとも呼ばれ、沖永良部島、与論島で歌われています。与論島では、「昔いきんとう」「上げいきんとう」「道いきんとう」等5種のバー

ジョンに分れていますが、沖永良部ではこの一種です。

「いちんとー」のいわれについてはいくつかの説がありますが、これは「池当」つまり「池の周辺にある草原」のことで、現在の和泊町出花集落の丘陵地帯を指すといわれます。昔この唄が、ここでよく歌われていたことからついたという説が有名です（沖永良部出身の民俗学者、柏常秋さん説）。また、与論島の唄者で研究家でもあった川村俊英さんは、薩摩が統治していた時代に島が飢饉に会い、島民が「イキャシ イキチ イキュラガ（どうして生きていこうか）」と嘆いた言葉が、曲名に反映されたといっています。

いずれにせよ、もの静かでシミジミした印象を持った唄で、沖永良部では「なーじるがい」（三味線の中の弦をかき鳴らすような味のある唄）とか、「いちか節」（短い一節）といった別名もあります。

歌い出しの「ウシー」といった長く引く部分も印象的で、柏常秋さんは日本の神楽の警蹕（けいひつ 神高い人が出入りする時の先払い）の言葉に似ている、と語っていました。この録音の4番の歌詞のように、もともと祈りのための唄だったのかもしれませんが。

歌唱者

宮元 茂寿（みやもと しげひさ）昭和10年生まれ。和泊町出花出身。

いにし ぶし
稲摺り節

唄・三味線：赤地 一成
相方ハヤシ：名村 由美子

詞章 1

* 2 番以降歌詞のみ

イニシリシリヨ アラユリユリヨ
 (イニシリシリヨ アラユリユリヨ)
 ふとしゆがふどし ふみあわぬできて
 (サー イニシリシリヨ アラユリユリヨ)

共通語訳

今年世の中は果報（幸せ）な年となり、米も粟もたくさん
 できました。

※ハヤシコトバは「稲を摺れ摺れ。あら（稲殻）を選れ
 選れ」の意味。

詞章 2

ふみどうゆらりゆる あわぬゆらりゆみ

共通語訳

米を選び分けられても、粟は選り分けられません。

詞章 3

なんごくぬふみむ ゆてどひにやらしゆる

共通語訳

何石の米も、選り分けて少なくなります。

※稲殻を選り分けて除いていけば、米の量は減るということ。

詞章 4

きばていしりようないぬちゃ しきゅうめかみらしゅんど

共通語訳

頑張って摺りなさい、姉さんたち。支給米を差し上げますから。

※「しきゅうめ」は「シキュマ」（始給米）といわれる初穂祭に関係する米という説もある。

曲目解説

「イニシリシリヨ アラユリユリヨ」というハヤシコトバから始まる快活な唄です。歌詞は、奄美・沖縄に昔からたくさんある、米作りの文句を付けて歌われます。それも伝統的な詞の形、8886調の文句ですが、88ないし86調2句体を1節と考えている土地と、8886調4句体で1節とみなしている土地があるようです。赤嶺集落の場合は前者ですが、それが古風ともいえます。

ところで、「稲摺り節」は、奄美の唄というより、奄美・沖縄全域に伝わる唄です。特に奄美大島では、沖縄の方から伝来した唄と感じている人が、多いのではないのでしょうか。奄美出身の民謡研究家、久保けんおさんも、『南日本民謡曲集』（音楽之友社 昭和35年発行）のなかで、この「稲摺り節」は沖縄から入ってきたものですが、徳之島以北は琉球旋法（沖縄メロディー）では歌わないと記しています。

なお、この唄の起源を、稲摺る時の仕事唄としている人もいますが、実際には、豊年を感謝したり、祈願する儀礼歌だというのが正しいようです。

お隣の徳之島のある地域には「畦越（あぶしく）えの水」「作（ちく）たの米」「稲摺り節」という座敷の踊り唄が3曲あり、続けて歌うことになっていたそうです。つまり、米作りの順序（田の畦作り→米つくり→脱穀）を歌うことで、豊作を祈願するという意識が人々の間にあったことを表しています。

歌唱者

赤地 一成（あかち かずなり）昭和41年生まれ。知名町赤嶺出身。